八重山小浜方言の音韻

仲 原 穣

はじめに

本稿の目的は、沖縄県八重山郡竹富町字小浜の音韻体系を明らかにするこ とである。小浜(こはま。方言ではクモーマ [kumo:ma] などという)は、沖 縄県八重山郡竹富町に所属する16の島々(有人島9つ、無人島7つ)の一つ で、八重山郡の中心地である石垣島から西へ約11キロメートルに位置する。 島への交通手段は船に限られており、石垣島から高速艇で約30分である。周 囲16.57キロメートル・面積782ヘクタールの島で、主な産業はサトウキビを 中心とした農業と牛を中心とした畜産業、そしてリゾートホテルや民宿など を中心とする観光業である。近年、NHKのドラマのロケ地に選ばれた影響 で観光客が増えてきている。小浜島の人口は、1700年代後半には900人であっ たとの記録があるが、昭和27(1952)年以降、減少が続き、平成7(1995) 年の国勢調査によると486人(男性242人・女性244人)と報告されている(平 成10年度版 竹富町勢要覧「島しょ別人口」)。島民の大半が高齢者であるが、 観光業や諸設備の建設に伴って、壮年層や若年層のUターンも増えてきてい る。しかし、老年層と若年層間のコミュニケーションは、シゥマ ムニ

[sīma muni] 〈島のことば〉ではなく、方言混じりの共通語が主であり、若 者の方言伝承が危ぶまれている。そんな状況ではあるが「伝統行事の際は小 浜のことばを使う」というルールがあり、行事の際には地元の小中学生はも とより、赴任や転校によって他の島からきた先生方や生徒も方言で口上を述 べるのだという。

現在、小浜島と西表島の古見、新城島、石垣島の宮良の4集落には、共通 した豊年祭の民俗行事が継承されている。また1771年の「明和の大津波」に よって壊滅的な打撃を受けた宮良村(現在の石垣市宮良)へ当時の島民の約 3分の1にあたる320人が移住させられた歴史があり⁽²⁾,現在でも互いに親愛 の念を抱いている。

-259 -

小浜島で用いられていることばは、先祖代々小浜島で生活を続けている島 民が用いる小浜方言と、沖縄島などから移住した人々が暮らす細崎で用いら れている方言に大別される。小浜方言については、これまでにいくつか先行 研究が報告されているが、音韻に関するものとしては、平山輝男・大島一郎・ 中本正智 (1967)、琉大方言研究クラブ (1969) と加治工真市 (1982) がある。 特に加治工 (1982) は、音素の抽出方法を細かく示し、音韻対応によってそ の言語変化について述べたもので、本稿をまとめるうえで非常に参考になっ た。

調査は2001年4月から2003年3月にかけて、基礎語彙を中心とする臨地調 査をおこなった。小浜方言のインフォートは、大嵩昭氏、慶田城ヒテ氏、小 浜ミヨ氏、大久秀氏、新本英光氏、新本ユキ氏である。全員小浜島の生まれ で、言語形成期を島で過ごし、調査時に島で生活していた方々である。

1. 音韻体系

1.1.音素

小浜方言の音素は、これまでの調査によると25個認められる。 母音音素 / i, ï, e, a, o, u / (6個) 半母音音素 / j, w / (2個) 子音音素 / h, ', k, g, t, d, n, c, s, z, r, p, b, m / (14個)

拍音素 / N, Q, R/ (3個)

1.2. 拍体系

小浜方言の拍構想は次の通りである。

- 一般拍 (1) C V (2) C S V
- 特殊拍 (3) N (4) Q (5) R
- (1) にはすべての子音と母音が属する。
- (2) の / j / の系列は /Cja/, /Cjo/, /Cju/ である。/w/ の系列は /Cwa/ の みである。

(※Cは子音音素、Vは母音音素、Sは半母音音素を表す。)

- (3) 撥音 /N/ は語頭、語中、語末に立つ。
- (4) 促音 /q/ は語頭、語中に立つ。
- (5) 長音 /R/ は語中、語末に立つ。

1.3. 拍表

小浜方言の拍体系を示すと次の通りである。

拍表

'i	*	'e	'a	'o	'u	'ja	'jo	'ju	'wa
[(?)i ~ ji]		[(?)e \sim je]	[(?)a]	[(?)o]	[(?)u]	[ja]	[jo]	[ju]	[wa]
hi	*	*	ha	ho	hu	*	*	*	hwa
[çi]			[ha]	$[ho\sim\varphi_0\sim fo]$	$[\varphi u \sim fu]$				$[\varphi a \sim fa]$
ki	kï	ke	ka	ko	ku	kja	kjo	kju	kwa
[ki]	$[k^{\rm S}i\sim k\ddot{\imath}]$	[ke]	[ka]	[ko]	[ku]	[kja]	[kjo]	[kju]	[kwa]
gi	*	ge	ga	go	gu	*	*	*	*
[gi]		[ge]	[ga]	[go]	[gu]				
ti	*	te	ta	to	tu		—	·	-
[ti]		[te]	[ta]	[to]	[tu]				
di	*	de	da	do	du				· — .
[di]		[de]	[da]	[do]	[du]				
ni	*	ne	na	no	nu	—	_	_	_
[ni]		[ne]	[na]	[no]	[nu]				
ri	rï	re	ra	ro	ru	_	_	_	-
[ri]	[rï]	[re]	[ra]	[ro]	[ru]				
ci	cï	ce	ca	со	cu	cja	cjo	cju	<u> </u>
[t∫i]	[tsï]	$[tse \sim t je]$	[tsa]	[tso]	[tsu]	[t∫a]	[t]o]	[t∫u]	
zi	zï	*	za	zo	zu	zja	djo	*	_
[d3i]	[dzï]		[dza]	[dzo]	[dzu]	[d3a]	[d30]		
si	sï	se	sa	so	su	sja	*	*	_
[ʃi]	[sï]	$[se\!\sim\!]_{\!$	[sa]	[so]	[su]	[ʃa]			

pi	рї	pe	pa	ро	pu	*	pjo	*	
[pi]	$[\mathrm{p}^{\mathrm{S}}\mathbf{\ddot{i}}\sim\mathbf{p}\mathbf{\ddot{i}}]$	[pe]	[pa]	[po]	[pu]		[pjo]		
bi	*	be	ba	bo	bu	*	bjo	*	
[bi]		[be]	[ba]	[bo]	[bu]		[bjo]		
mi	*	me	ma	mo	mu	*	mjo	*	
[mi]		[me]	[ma]	[mo]	[mu]		[mjo]		
N		Q				R			
[ŋ,n,r	n,N]	[þ ,f,k	,kw,t,ts,t	[,s,p]		[¤](i,i	i,e,a,o,u)		

(*印は未確認の拍、一は体系的あきま)

上に述べた音素と拍の体系について記述すると以下の通りである。

1.4. 母音音素

小浜方言の母音音素は / i /, / i /, / e /, / a /, / u /, / o / である。小浜方言の母音 が語頭にたつ場合、音声的に [?] を伴う傾向があるが、意味を弁別するもの ではない。

小浜方言の母音の特徴として、母音の無声化が挙げられる。東日本方言や 九州方言、北琉球方言の諸方言などで無声の子音に挟まれた狭母音が無声化 するのに対し、当該方言には広母音 [a] の無声化がみられる。これは南琉球 方言の諸方言に広くみられる減少であるが、小浜方言では、波照間方言や西 表古見方言などのように、続く有声子音 [m, n, r] まで無声化する。ただし、 インフォーマントや語彙によって、無声化しないものもみられる。

○母音の無声化の例

[i];/pisjahanu/[piJahanu] 〈寒い〉、/cipi/[tʃipi] 〈尻〉

[ï];/pïtu/[p^sïtu] 〈人〉、[wa:tsïk^sï] 〈天気〉

[u];/gusuku/[gusuku] 〈石垣〉、/sakuhor/[sakuho:] 〈農家〉

[a];/kakan/[kakan] 〈下裳〉、/tapï/[tap^sï] 〈旅〉

〇子音の無声化の例

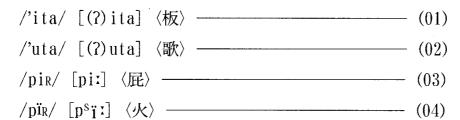
[m];/samorma/[samorma] 〈赤ん坊用の頭巾〉

-262 -

[n];/cïna/[tsïna] 〈綱〉、/sinor/[∫ino:] 〈篩〉 [r];/pira/[pira] 〈箆〉

1.4.1. 狭母音音素

小浜方言の狭母音音素は / i / , / i / , / u / である。以下のような音韻的対 立がみられる。



(01)対(02)は[i]対[u]の対立である(A)。また(03)対(04)は、
[i]対[i]の対立である(B)。この関係式(A)(B)を介することにより[i,
i,u]はそれぞれ音素/i/,/i/,/u/と認められる。なお、中舌母音/i/には、
摩擦的噪音[⁵]が先立つ場合がある([p,k]の後のみ)。

語例

/i/

/'ir/ [(?) i:] 〈胃〉, /'icï/ [(?) it sï] 〈魚〉, /'ic imun/ [(?) it ſ imun]

〈一門(親類)〉, /'imi/[(?)imi] 〈夢〉, /'isaki/[(?)isaki] 〈石垣島〉, /'inaxkï/[(?)inaŋk^sï] 〈杵〉, /nubu'i/[mubui] 〈首〉, /ma'i/[mai] 〈米〉, /pa'i/[pai] 〈足〉, /kanaha'i/[kanahai] 〈鍬〉, /sïsa'i/[sïsai] 〈皿〉, /makor'i/[makori] 〈椰子蟹〉, /'ja'i/[jai] 〈来年〉, /ma'iharru/[maiha:ru] 〈大きな〉

/i/

/sïn/ [sïn] 〈木炭〉,/mincïkami/ [mintsïkami] 〈水瓶〉,/pïr/ [p^sïː] 〈火〉, /turï/ [turï] 〈鳥〉, /handa musï/ [handa musï] 〈茣蓙〉 /u/

/'uraza/ [(?)uradza] 〈裏座 (寝所)〉, /'utu/ [(?)utu] 〈音〉, /'usï/ [(?)usï] 〈牛〉, /'unzur/ [(?)undzu:] 〈布団〉, /'u'ipïtu/ [(?)uip^sïtu] 〈老 人〉, /'a'uta/ [(?)auta] 〈蛙〉, /'a'u/ [(?)au] 〈青〉

1. 4. 2. 半狭母音音素

小浜方言の半狭母音音素は /e/, /o/ である。以下のような音韻的対立がみ られる。

/per/ [peː] 〈杓子〉 _____ (05)

/por/ [poː] 〈帆〉 _____ (06)

(05) 対(06) は、[e] 対 [o] の対立である。よってそれぞれ音素 /e/,/o/と認められる。

語例

/e/

/nerrï/ [neːrï] 〈右〉, /kanduner/ [kanduneː] 〈一番座 (客間)〉, /mermer/ [meːmeː] 〈真似ること〉, /mer/ [meː] 〈もう〉

/0/

/'ornku/ [(?)oinku] 〈膿〉, /'o'iki'jar/ [(?)oikijar] 〈金持ち〉,

/korma/ [korma] 〈独楽〉

1.4.3. 広母音音素

小浜方言の広母音は /a/ である。以下のような音韻的対立がみられる。

- $/tar/[ta:] \langle \boxplus \rangle$ (07)
- /tir/[tir] 〈手〉 ----- (08)
- /'ar/ [(?)aː] 〈粟〉 _____ (09)
- $/'ur/ [(?)u!] \langle \mathfrak{GI} \rangle$ (10)

(07) 対 (08) は [a] 対 [i] であり、(09) 対 (10) は [a] 対 [u] であ る。よって /a/ は音素と認められる。

語例

/a/

/'a'ibana/ [(?)aibana] 〈喉彦〉, /'arsi/ [(?)a:ʃi] 〈汗〉, /'arma/ [(?)aːma] 〈姉〉, /'ar'ja/ [(?)aːja] 〈父〉, /'ar'i/ [(?)aːi] 〈いいえ〉, /'akorpïr/

[(?) akoːpïː] 〈欠伸〉, /'a'unancï/ [(?) aunant sï] 〈青大将(蛇の一種)〉,

/'arnta/ [(?)a:nta] 〈東〉, /'abuci/ [(?)abutfi] 〈祖父〉, /'aburu/ [aburu] 〈団扇〉

1.5. 半母音音素

小浜方言の半母音音素は / j / と / w / であり、以下のような音韻的対立がみ られる。

- $/kjur/[kjur] \langle 2H \rangle$ (11)
- /'u'jar/ [(?)uja] 〈親〉 ————(13)
- $/'u'wa/[(?)uwa] \langle btac \rangle$ (14)

(11) 対(12) は、[j] 対ゼロ、すなわち [j] の有無によって対立している。また(13) 対(14) は、[j] 対 [w] である。これらにより、それぞれ音素 / j/, /w/ と認められる。

語例

/j/

/'jar/ [jaː] 〈家〉, /'jarsa/ [jaːsa] 〈空腹〉, /'jakor/ [jakoː] 〈櫂〉,

- /'ja'imunu/ [jaimunu] 〈痩せた人〉, /'jami/ [jami] 〈病気〉, /'jama/ [jama] 〈犂〉, /'jamata/ [jamata] 〈ゴキブリ〉, /ma'ja/ [maja] 〈猫〉,
- /'jorncu/ [joːntsu] 〈簪〉, /'jorhan/ [joːhan] 〈弱い〉, /'junda/ [junda] 〈枝〉,/'jur/ [juː] 〈湯〉,/ma'ju/ [maju] 〈眉〉

/w/

/'wanta/ [wanta] 〈豚〉, /'warn/ [waːn] 〈御 嶽〉, /'warcïkï/ [waːtsïkši] 〈天気〉, /niwar cïna/ [niwaː tsïna] 〈太い綱〉, /bur'wa/ [buːwa] 〈おば〉

1.6.子音音素

1.6.1. 喉頭音音素

小浜方言の喉頭音音素は /h/, / ' / である。以下のような音韻的対立がみ られる。

/haka/ [haka] 〈墓〉 ————(15)

/'aka/ [(?)aka] 〈赤〉 _____ (16)

(15) 対(16) は、[h] 対ゼロである。よって、/h/と/'/は音素と認められる。

このような最小対立の語例は限られており、加治工(1982:91)ですでに 指摘しているように新しい語例と考えられる。後に示すように当該方言と共 通語のハ行音との対応関係からすれば、(15)には *paka が予測されるが、 筆者のこれまでの調査では /haka/の語形以外には聞くことができない。

小浜方言の[f] は上歯に下唇をやや持ち上げて調音するが、宮古諸方言 のように強く響く[f] ではなく、インフォーマントによっては両唇音の[Φ] に観察される。念のためビデオカメラに録画して確かめたが、唇をやや突き 出した「丸め」が確認された。よって、これを自由変異と解釈した。

語例

/h/

/hingu/ [çiŋgu] 〈汚れ〉, /hirmar/ [çiːmaː] 〈玄孫〉, /'uhitu/

[(?)uçitu] 〈大人〉, /hana/ [hana] 〈鼻〉, /haku/ [haku] 〈箱〉, /Nkamahanu/ [ŋkamahanu] 〈喧しい様子〉, /horri'jar/ [ho:rija:] 〈便所〉, /sakuhor/ [sakuho:] 〈農家〉, /huku/ [Фuku ~ fuku] 〈肺〉, /huhwanu/ [ФuФanu ~ fufanu] 〈臭い〉, /'juNgahu/ [juŋgaΦu ~ juŋgafu] 〈豊年〉, /hwar/ [Φa: ~ fa:] 〈子供〉, /'arhwa/ [(?)a:Φa ~ (?)a:fa] 〈祖母〉 /'/

/'irimuti/ [(?)irimuti] 〈西表 (地名)〉, /ku'i/ [kui] 〈声〉, /'a'icï/ [(?)aitsï] 〈槌〉, /'a'umi/ [(?)aumi] 〈熟していない実〉, /'ju'imaʀru/ [juimaːru] 〈結い (共同作業)〉, /susa'jaʀ/ [susajaː] 〈白鷺〉, /'jaʀtoʀ'i/ [jaːtoːi] 〈やっと〉

1.6.2. 軟口蓋音音素

小浜方言の軟口蓋音音素は /k/, /g/ である。以下のような音韻的対立が みられる。

/kur/ [kuː] 〈粉〉 ————(17)

/gur/[gui] (\mathfrak{A}) ------ (18)

(17) 対(18) 対は、[k] 対 [g] である。調音点は同じだが、無声と有 声の最小対立により、意味を弁別している。よって /k/, /g/ は音素と認め られる。

-266 -

語例

/k/

/kir/ [ki:] 〈木〉, /hataki 'jar/ [hataki ja:] 〈畑家 (作業小屋)〉, /'iraki/ [(?)iraki] 〈鱗〉, /kïmu/ [k^sïmu] 〈肝〉, /kïn/ [k^sïn] 〈黍〉, /'warcïkï/ [waːtsïk^sï] 〈天気〉, /'akencï/ [(?) akentsï] 〈蜻蛉〉, /gooker/ [gokke:] 〈片足飛び〉, /mikaku/ [mikaku] 〈筵〉, /kakan/[kakan] 〈下裳〉, /korma/ [koːma] 〈卵〉, /sakor/ [sakoː] 〈咳〉, /kaku/[kaku] 〈囲い (塀)〉, /kurunkïkir/ [kuruŋk^sïkiː] 〈クロキ (植物名)〉, /kjarngi/ [kjaːngi] 〈イ ヌマキ (植物名)〉, /kjongin/ [kjongin] 〈狂言〉, /kjur/ [kjuː] 〈今日〉, /kwarkir/ [kwaːkiː] 〈桑の木〉

/g/

/gira/ [gira] 〈シャコ貝〉, /Ngi/ [ŋgi] 〈棘〉, /NgeR/ [ŋge:] 〈~に〉, /gaba/ [gaba] 〈垢〉, /garkï/ [gaːk^sï] 〈鎌〉, /kacigar/ [katʃiga:] 〈麻袋 (叺)〉, /gor'ja/ [goːja] 〈苦瓜〉, /'jamangor/ [jamaŋgoː] 〈乱暴者〉, /gusi/ [guʃi] 〈酒〉, /gusuku/ [gusuku] 〈石垣〉, /gusan/ [gusan] 〈杖〉, /NguN/ [ŋguN] 〈銛〉

1.6.3. 歯音·歯茎音音素

小浜方言の歯音・歯茎音音素は、/t/,/d/,/n/,/r/ である。以下のような 音韻的対立がみられる。

/tusï/ [tusï] 〈年齡〉———————————	(19)
/dusï/ [dusï] 〈友だち〉 ————————	(20)
/kata/ [kata] <fi]></fi]>	(21)
/kana/ [kana] 〈鉋〉 ———————————————————————————————————	(22)

/kara/ [kara] 〈~から〉 — (23)

(19) 対(20) は [t] 対 [d] である(A)。これは無声と有声の最小対立 である。(21) 対(22) 対(23) は [t] 対 [n] 対 [r] である(B)。これは 調音点はほぼ同じだが、調音方法が破裂音か通鼻音か弾き音かで対立してい る。関係式(A)(B) を介することにより、/t/と/d/と/n/と/r/はそれ ぞれ音素と認められる。 語例

/t/

/tir/ [tiː] 〈手〉, /tingara/ [tiŋgara] 〈箆の一種〉, /muti/ [muti] 〈顔〉, /terncï/ [teːntsï] 〈苺〉, /ta'i/ [tai] 〈嫉妬〉, /tar/ [taː] 〈田〉,

/mita/ [mita] 〈土〉, /torrarn/ [toːraːn] 〈影〉, /huntor/[фuntoː ~ funtoː] 〈本当〉, /mitoma/ [mitoma] 〈陰門〉, /turï/ [turï] 〈鶏〉, /bututi/ [bututi] 〈一昨日〉, /'itu/ [(?)itu] 〈糸〉

/d/

/'undi/[(?)undi] (腕〉,/derncï/[de:ntsï] (大変〉,/'underma/[(?)unde:ma] (細い腕〉,/darbura/[da:bura] (腓〉,/ndahun/[ndaФun ~ ndafun] (出す〉, /pindaru/[pindaru] (柄杓〉,/cinda/ [tʃinda] (太陽〉,/ganda/ [ganda] (乾燥している田〉, /kandorra/ [kando:ra] (雷〉, /duku/ [duku] (毒〉, /mindun/ [mindun] (女〉, /bikindun/ [bikindun] (男〉

/n/

/nisinta/ [nifinta] 〈北〉, /pani/ [pani] 〈羽〉, /nerra/ [ne:ra] 〈右〉, /saner/ [sane:] 〈褌〉, /nakanza/ [nakandza] 〈土間〉, /minaka/ [minaka] 〈屋敷内の広場〉, /hana/ [hana] 〈黴〉, /nor/ [no:] 〈野〉, /sinor/ [fino:] 〈篩〉, /'inor/ [(?)ino:] 〈砂〉, /bu'inor/ [buino:] 〈斧の一種〉, /nun/ [nun] 〈蚤〉, /banu/ [banu] 〈私〉

/rinkï/ [riŋk^sï] 〈悋気〉, /pantariru/ [pantariru] 〈太る (連体形)〉, /nger'warri/ [ŋge: waːri] 〈召し上がれ〉, /murï/ [murï] 〈森〉, /pïkarer/ [p^sïkareː] 〈蛍〉, /'jamakarasï/ [jamakarasï] 〈鉈〉, /kukuraki/ [kukuraki] 〈胸焼け〉, /para/ [para] 〈柱〉, /pira/ [pira] 〈箆〉, /karra/ [kaːra] 〈川〉, /ma'iharrornar/ [maihaːroːna] 〈大きいね〉, /pïturu/ [p^sïturu] 〈稲光〉, /hapiru/ [hapiru] 〈蝶〉

1.6.4. 硬口蓋音音素

小浜方言の硬口蓋音音素は、/c/,/z/,/s/ である。以下のような音韻的対

-268 -

立がみられる。

/cïr/ [tsïː] (fft) ———————————————————————————————————	(24)
/zïr/ [dzīː] 〈地〉	(25)
/zar/ [dzaː] 〈座〉 ———————————————————————————————————	(26)
/sar/ [saː] 〈崖〉 ———————————————————————————————————	(27)

(24) 対 (25) は [ts] 対 [dz] であり (A)、(26) 対 (27) は [dz] 対 [s]
である (B)。関係式 (A) は調音点は同じだが、無声か有声かで対立している。
関係式 (B) は、調音点は同じだが、調音方法が破擦か摩擦かという点で対
立している。これら関係式 (A) (B) により、/c/ と /z/ と /s/ はそれぞれ
音素と認められる。

なお、/c/は [ï, a] の前では [ts] であり、[i] の前では [tʃ] である。 さらに /z/ も [ï, a] の前では [dz] であり、[i] の前では [dʒ] である。 また、/s/ も [ï, a, o, u] の前では [s] であり、[i] の前では [ʃ] である。 これらはそれぞれ相補分布と見なし、音素 /c/ と/z/ と/s/ にまとめること ができる。

語例

/c/

/cirum/[tfiru:]〈芋を入れる籠〉,/cincimi/[tfintfimi]〈爪〉,/cinci/[tfintsi] 〈唾〉, /ciburu/ [tsiburu]〈頭〉, /paci/ [patsi]〈梯子〉, /kakuci/ [kakutsi]〈顎〉, /'icem/ [(?)itfe:n]〈いつも〉, /'acama/ [(?)atsama] 〈おじ〉, /'jucam/ [jutsa:n]〈丈の短い着物〉, /com/ [tso:n]〈注ぐ〉, /pucomma/ [putso:ma]〈臍〉, /curu/ [tsuru]〈釣瓶〉, /cjam/ [tfa:]〈茶〉, /makucjam/ [makutfa:n]〈脇の下〉, /cjomi/ [tfo:mi]〈長命(長生)〉, /cjuqkam/ [tfukka:]〈急須〉, /'u'jacju/ [(?)ujatfu]〈鼠〉

/zinman/[dʒimman] 〈膳〉, /ziri/[dziri] 〈どれ〉, /zabura/[dzabura] 〈腓〉, /za'ingir/[dzaiŋgiː] 〈木材〉, /ganzan/[gandzan] 〈蚊〉, /kanza/[kandza] 〈匂い〉, /zor/[dzoː] 〈門〉, /punzor/[pundzoː] 〈煙草入れ〉, /sunzuru/ [sundzuru] 〈モズク〉, /sinzja/[findʒa] 〈砂糖黍〉, /zjornkï/[dʒoːŋk^sï] 〈定規〉 /s/

/sini/ [fini] 〈脛〉, /'isiper/ [(?)ifipe:] 〈小便〉, /sïta/ [sïta] 〈舌〉, /sïsan/ [sïsan] 〈虱〉, /'jurasï/ [jurasï] 〈篩の一種〉, /serngu/ [seːŋgu] 〈ハマユウ (植物名)〉, /'iserma/ [(?)ifeːma] 〈小石〉, /sakuruber/ [sakurubeː] 〈しゃっくり〉, /'jarsa/ [jaːsa] 〈空腹〉, /tsïsa/ [tsïsa] 〈頬〉, /sorki buni/ [soːki buni] 〈肋骨〉, /pinsor/ [pinsoː] 〈貧相(貧 乏)〉, /sur/ [surː] 〈汁〉, /gusu/ [gusu] 〈唐辛子〉, /pisjahanu/ [piʃahanu] 〈寒い〉

1.6.5. 両唇音音素

小浜方言の両唇音音素は /p/, /b/, /m/ である。以下のような音韻的対立が みられる。

/pir/	[piː]	〈笛〉	 (28)
/bir/	[biː]	〈藺〉	 (29)
/par/	[paː]	〈歯〉	 (30)
/bar/	[baː]	〈私〉	 (31)
/mar/	[maː]	〈孫〉	 (32)

(28) 対 (29) は、[p] 対 [b] である。また、(30) 対 (31) 対 (32) は [p]
 対 [b] 対 [m] である。よって、/p/, /b/, /m/ はそれぞれ音素と認められる。
 語例

/p/

/pik/ [pi:] 〈屁〉, /cipi/ [tfipi] 〈尻〉, /karapisa/ [karapisa] 〈裸足〉, /pik/ [p^sin] 〈鬚〉, /pikuk/ [p^sikuk] 〈帯〉, /tupisi/ [tupisi] 〈砥石〉, /pek/ [pe:] 〈杓子〉, /pekkuru/ [pekkuru] 〈蝉〉, /isipek/ [(?)ifipe:] 〈小便〉, /pa'iru/ [pairi] 〈酢〉, /hokpak/ [hokpak] 〈ヒハツモドキ(植 物名)の葉〉, /pok/ [pok] 〈帆〉, /pucokma/ [putsokma] 〈臍〉, /sapuk/ [sapuk] 〈石鹸〉, /kapusu/ [kapusu] 〈ガンシナ(道具名)〉, /pjo'utu/ [pjoutu] 〈海豚〉

/b/

/bir'ja/ [biːja] 〈兄〉, /bir'jarma/ [biːjaːma] 〈燕〉, /kubiqca/ [kubittʃa]

〈壁〉,/nabera/[nabera]〈糸瓜〉, /sakuruber/[sakuruber]〈しゃっくり〉, /barki/[ba:ki]〈籠〉, /'ababa/[(?)ababa]〈亞者〉, /saba/[saba]〈草 履〉, /bonpara/[bompara]〈泡〉, /kubohun/[kuboΦun ~ kubofun]〈零す〉, /bu'inu/[buinu]〈斧の一種〉, /'iburu/[(?)iburu]〈息〉, /'abuci/ [(?)abutfi]〈祖父〉, /bjornu/[bjo:nu]〈酔わない〉

/m/

/misjaku/ [mifaku] 〈神酒〉, /minakaku/ [minakaku] 〈空き家〉, /mer/ [meː] 〈広場〉, /cïndame/ [tsïndame] 〈蝸牛〉, /marsu/ [maːsu] 〈塩〉, /marhan/ [maːhan] 〈旨い〉, /ma/ [mma] 〈馬〉, /guma 'inorma/ [guma (?) inoːma] 〈子犬〉, /kumorï/ [kumorï] 〈池〉, /samorma/ [samoːma] 〈赤ん坊用の頭巾〉, /muqcanu/ [muttsanu] 〈べとべとした様子〉, /musï/ [musï] 〈筵〉, /mjortu/ [mjoːtu] 〈夫婦〉

1.7. 拍音素

小浜方言の拍音素は / N/, / Q/, / R/ である。

1.7.1. 撥音/N/

/kan/	[kan]	〈神〉		(33)
-------	-------	-----	--	------

(33) 対(34) は [N] 対 [:] の対立である。よって、/N/ は音素と認められる。

/N/は、次に来る子音によって調音位置が決まっており、一拍を形成する。
 具体的には、以下に示すように軟口蓋音 [k,g]の直前では軟口蓋鼻音 [n]、
 歯茎音 [t, d, ∫, t∫, dʒ, n] と歯音 [s, ts, dz]の直前では歯茎鼻音 [n]、両唇
 音 [b, p, m]の直前では両唇鼻音 [m]、語末では軟口蓋鼻音 [N] である。こ
 れらはいずれも鼻音であるという共通の特徴を有している。よって、/N/は

[ŋ, n, m, N] の異音を有すると解釈することができる。

語例

/N/

/minkar/ [miŋka:] 〈耳の遠い人〉, /ngana/ [ŋgana] 〈苦菜(植物名)〉, /gunbor/ [gumbo:] 〈庶子〉, /'anni/ [(?) anni] 〈母〉, /minta/ [minta] 〈鬢〉,

/'jandu/ [jandu] 〈戸〉, /sansirar/ [sanʃiraː] 〈しゃもじ〉, /tuncï/ [tuntsï] 〈妻〉, /'anza/ [(?)andza] 〈黒子〉, /nundu/ [nundu] 〈喉〉, /'akanci/ [(?)akantsi] 〈髪の毛〉, /minbani/ [mimbani] 〈鰭〉, /nma/ [mma] 〈馬〉, /'in/ [(?)in] 〈海〉

1.7.2. 促音/Q/

/magka'i/ [makkai] 〈負かす〉 ——— (35)

/maka'i/ [makai] 〈賄う〉 ——— (36)

(35)対(36)は[k]対ゼロである。つまり、/q/の有無が弁別的特徴として働いているといえる。よって、/q/は音素と認められる。

/q/は、次に来る子音と同じ調音点の子音が一拍をなす。具体的には、以下に示すように [ϕ , f] の前では [$\phi \sim$ f]、[k, kw] の前では [k]、[t, ts, tʃ] の前では [t]、[s] の前では [s]、[p] の前では [p] である。この場合、音声的実質の相違は意味の弁別に関わっておらず、分節音素の音声的環境をこえた一定の時間的単位と認められる。

語例

/Q/

/niqhwar/ [niфФa: ~ niffa:] 〈寝るのは〉, /niqkiri/ [nikkiri] 〈鋸〉, /miqkwar/ [mikkwa:] 〈盲者〉, /siqtiri/ [ſittiri] 〈捨てろ(強調)〉, /poqcar/ [pottsa:] 〈包丁〉, /maqcjarn/ [mattfa:n] 〈褌(女性用)〉, /mukaqsa/ [mukassa] 〈昔は〉, /hoqpar/ [hoppa:] 〈つる草〉

1.7.3. 長音 /R/

/'jarma/ [jaːma] 〈台所〉 _____ (37)

/'jama/ [jama] 〈山〉 _____ (38)

(37)対(38)は[:]対ゼロである。つまり、/R/の有無が弁別的特徴として働いているといえる。/R/は、その直前の母音と同じ口構えで一拍分長 く調音されるものである。これら長音の音声実質はそれぞれ直前の母音と同 じであるが、分節音素としてのそれぞれの母音の属性をこえて、時間的単位 としての一拍分の長さが意味の弁別に関与していると解釈できる。 語例

/R/

/tirpisa/[ti:pisa] 〈掌〉, /mirmancï/[mirmantsï] 〈虹〉, /birn/[bi:n] 〈溝〉, /zïr/ [dzï:] 〈地〉, /piserma/ [piferma] 〈娘〉, /'arra/ [(?)a:ra] 〈蟻〉, /'arna/ [(?)a:na] 〈穴〉, /karsu/ [ka:su] 〈下水〉, /sarncï/ [sa:ntsï] 〈手拭い〉, /'jakor/ [jako:] 〈櫂〉, /tor/ [to:] 〈窪地〉, /gunbor/ [gumbo:] 〈蜘蛛〉, /bur/ [bu:] 〈尾〉, /'jurhuru/ [ju:фuru ~ ju:furu] 〈風呂〉

2. 音韻対応

小浜方言といわゆる共通語との対応関係を個別拍と拍連続で以下に示す。

2.1. 個別拍の対応

2.1.1. ア行音

共通語 ア イ ウ エ オ

小浜島 'a 'i 'u 'i 'u

ア:[(?)ami] 〈雨〉,

イ: [(?) ifi] 〈石〉, [(?) iru] 〈色〉, [(?) ikusa] 〈戦〉

ウ: [(?)uta] 〈歌〉, [(?)usï] 〈牛〉, [(?)usï] 〈臼〉

ただし、共通語のウが語頭において /N/ に対応している例もみられる。

[mma] 〈馬〉

また、共通語のウが後続する子音に同化されて撥音化し、脱落している 例もみられる。

[marirun] 〈生まれる〉

なお、/z/と/c/と/s/の後に位置する共通語の/u/は/i/に対応する のが一般的である。

ズ:[kintsï] 〈傷〉

ツ: [tsïna] 〈綱〉

ス:[sïː] 〈巣〉

エ:[(?)ip^sï] 〈蝦〉, [kui] 〈声〉

オ: [(?)utu] 〈音〉, [(?)u:] 〈大〉

2.1.2. 力行音

• • •	//	. [
共	通語	力	キ	ク	ケ	コ		
小	浜島	ka	kï	hu	ki	ku		
力:	[kasa]	〈笠〉,	[kạni]	〈金(劉	跌)〉,	[haka]	〈墓〉	
た	だし、扌	もうちょう しんしょう しんしょ しんしょ	ワカが /	ga/ に	対応し	ている	例もみられる。	
	[garasï]	(烏〉						
な	お、共通	通語のプ	」か /kw	a/ に 対	応して	いる場	合もある。	
	[kwaːsï]	〈菓子	$\cdot \rangle$					
キ:	[k ^s ïnu]	〈衣〉,	[k ^s ïsu] 〈着〉	る〉, [.	juk ^s ï]	〈雪〉	
た	だし、井	は通語の	Dキが /	ki/に	対応し	ている	列もみられる。	
	[kiː] <7	木〉						
ク:	[Q utsï ~	~ f u ts	ï] 〈□〉	, [Фu	$v \sim fu$	w] 〈釘〉		
た	だし、井	に通語の	つクが /	ku/ にき	対応し	ている	列もみられる。	
	[niku]	〈肉〉						
用	例は少な	ないが、	共通語	のクか	۶/ko/	に対応	している例もあ	る。
	[(?) akoz	[p ^s ïː]	〈欠伸〉,	[mako	ra] (枕〉		
ケ:	[ki¤] <≡	毛〉,[1	t a ki] <	竹〉				

- コ: [kuː] 〈粉〉, [muku] 〈婿〉
- 2.1.3. ガ行音
 - 共通語 ガ ギ グ ゲ ゴ
 - 小浜島 Nga 'i Ngu Nki Ngu
 - ガ: [kuŋgani] 〈黄金〉, [tiŋganeː] 〈手金 (指輪)〉, [niŋgai] 〈願い〉 [haŋgamaː] 〈羽釜〉

ただし、共通語のガが / אka/ に対応している例もみられる。

[kaŋkan] 〈鏡〉

なお、共通語のガの直前の母音が /a/ の場合は [g] が脱落し、/k/[a] に対応する例がみられる。

[naːri] 〈流れ〉, [naːhaːru] 〈長い〉 ギ: [mui] 〈麦〉, [pai] 〈脛(足)〉

-274 -

また、共通語のギが / ki / に対応している例もいくつかみられる。 [dʒoŋk[®]i] 〈定規〉

- 用例は少ないが、共通語のギが / N/ に対応している例もある。 [Φun ~ fun] 〈釘〉
- グ: [dongu] 〈道具〉
- ゲ: [piŋkirun] 〈逃げる〉, [naŋkirun] 〈投げる〉
 - ただし、共通語のギが / Ngi / に対応している例もみられる。
 - [ŋgi] 〈棘〉
 - また、語中の共通語のゲが /N/ に対応している例もみられる。
 - [p^sïN] 〈鬚〉
- ゴ:[juŋguri] (汚れ)
- 2.1.4. サ行音
 - 共通語 サ シ ス セ ソ
 - 小浜島 sa sï si su
 - サ: [saja] 〈鞘〉, [san] 〈桟〉
 - ただし、共通語のサが /ca/ に対応している例もみられる。
 - [patsan] 〈鋏〉,
 - 用例は少ないが、共通語のサが /si/ に対応している例もある。 [sita] 〈砂糖〉
 - シ: [sïma] 〈島〉, [sïkï] 〈敷居〉, [musï] 〈虫〉
 - ただし、共通語のシが /ci/ に対応している例もみられる。
 - [kutsï] 〈腰〉, [putsï] 〈星〉
 - また、共通語のシが /si/ に対応している例もみられる。 [(?) a:fi] 〈汗〉, [(?) ifi] 〈石〉
 - ス: [sïː] 〈巣〉, [sïN] 〈炭 (木炭)〉, [sïsï] 〈煤〉
 - ただし、共通語のスが /si/ に対応している例もみられる。

[ʃini] 〈脛〉, [ʃitirux] 〈捨てる〉

また、共通語のスが /ci/ に対応している例もみられる。 [**ф**utʃiri ~ futʃiri]〈薬〉 セ: [kifiru] 〈キセル〉, [(?)a:fi] 〈汗〉

ソ: [suku] 〈底〉, [(?) asupu] 〈遊ぶ〉

ただし、共通語のソが /sju/ に対応している例もみられる。

[mifu] 〈味噌〉

2.1.5. ザ行音

共通語 ザ ジ ズ ゼ ゾ

小浜島 nza ncï ncï nzi nzu

ザ:[(?)andza] 〈痣〉

ただし、共通語のザが語頭にある環境においては /za/ に対応する。 [dzaiŋgi:] 〈材木〉

ジ: [pintsï] 〈返事〉, [(?) arointsï] 〈主〉

ただし、共通語のジが語頭である環境においては /zi/ に対応する。 [dzi:] 〈字〉

また、共通語のジが /wzi/ に対応している例もみられる。

[kandʒi] 〈火事〉

ズ: [bointsi] 〈坊主 (僧侶)〉, [kintsi] 〈傷〉

ゼ: [kandʒi] 〈風〉

ただし、共通語のゼが /zi/ に対応する例もみられる。

[dʒin] 〈銭 (お金)〉

ゾ: [kundzu] 〈去年〉

2.1.6. 夕行音

共通語 タ チ ツ テ ト

小浜島 ta cï cï ti tu

ただし、共通語の夕が語中において有声化し /da/ に対応している例も みられる。

[bada] 〈腸 (腹)〉

チ: [tsïː] 〈血〉, [tsïtsï] 〈乳〉, [hatsï] 〈蜂〉, [katatsï] 〈形〉,

[tsïkara] 〈力〉,

ツ: [tsïnu] 〈角〉, [tsïna] 〈綱〉, [nitsï] 〈熱〉

テ: [tix] 〈手〉, [tix] 〈天〉

- ト: [tura] 〈寅〉, [(?) atu] 〈跡〉, [(?) itu] 〈糸〉
 - ただし、口蓋化により共通語のトが /cu/ に対応することがある。 [(?) it ʃufu] 〈いとこ〉
- 2.1.7. ダ行音

共通語 ダ(ヂ)(ヅ) デ ド

小浜島 nda ncï ncï ndi ndu

ダ: [handaka] 〈裸〉, [panda] 〈肌〉, [(?) amandari] 〈雨垂れ(滴)〉, [(?) andani] 〈アダン(植物名)〉

ただし、共通語のダが語頭にある場合は /da/ に対応している。 [dai] 〈台〉

また、共通語のダが /ta/ に対応している例もみられる。

[tap^si]〈荼毘〉, [(?)asïta]〈足駄 (下駄)〉, [kjo:tai]〈兄弟〉 (ヂ): [(?)antsï]〈味〉, [pintsï]〈肘〉

ただし、共通語のヂが語頭にある場合は /zi/ に対応している。

- [dzïː] 〈地〉
- (ヅ): [mintsï] 〈水〉
 - ただし、共通語のヅが /nci/ に対応している例もみられる。 [fintfimirux] 〈沈める〉
- デ:[(?)undi] (腕)
- ド: [nundu] 〈喉〉, [kandu] 〈角〉
 - ただし、共通語のドが語頭にある環境では /du/ が対応する。 [du:] 〈胴(体)〉, [durax] 〈銅鑼〉
- 2.1.8.ナ行音

共通語	ナ	-	ヌ	ネ	ノ
小浜島	na	ni	nu	ni	nu

-277 -

ナ: [nax] 〈名〉, [katana] 〈刃〉, [pana] 〈花〉

二: [niː] (荷), [mainitsï] (毎日)

なお、共通語の二が軟口蓋音に先立つ環境では /N/ に対応する場合もある。

[ŋgana] 〈苦菜 (植物名)〉

また、共通語の二が語尾にある環境では /'i/ に対応する。

[kai] 〈蟹〉

ヌ: [(?) inu] 〈犬〉

ネ: [nix] 〈根〉, [tani] 〈種〉, [pani] 〈羽〉, [kani] 〈金〉

ノ: [munu] 〈物〉, [nunu] 〈布〉

ただし、共通語のノが /no/ に対応する例も認められる。 [no:] 〈野〉

2.1.9. ハ行音

共通語 ハ ヒ フ ヘ ホ

小浜島 pa pï hu pi pu

ハ: [pana] 〈花〉, [parï] 〈針〉, [pantsïx] 〈放つ〉, [takinu paː] 〈竹の葉〉 ただし、共通語のハが /ha/ に対応する例もある。

[handaka] 〈裸〉, [hakux] 〈吐く〉, /hacï/ [hatsï] 〈橋〉, [haku] 〈箱〉 [haː] 〈刃〉, [haː] 〈葉〉

ヒ: [p^sïkari] 〈光〉, [p^sïtu] 〈人〉, [p^sïx] 〈火〉

ただし、共通語のヒが /pi/ に対応している例もみられる。

[pintsï] 〈肘〉, [pindarï] 〈左〉

フ: [ϕ uni ~ funi] (船), [ϕ uta ~ futa] (蓋)

へ: [piː] 〈屁〉, [pira] 〈箆〉

ホ: [puni] 〈骨〉

ただし、共通語のホが /po/ に対応する場合もある。

[poː] 〈帆〉

また、共通語のホが /hu/ に対応する場合もある。

[**quja**~fuja] 〈火屋〉

2.1.10. バ行音

ビブベ 共通語 バ ボ 小浜島 ba pï pu bi bu. バ: [tabaku] 〈煙草〉 ただし、共通語のバが /'wa/ に対応する例もみられる。 [bu:wa] 〈おば〉 ビ: [tap^sï] 〈旅〉, [(?)up^sï] 〈帯(箍)〉ただし、共通語のビが /bi/ に対応する例もみられる。 [(?)ibi] 〈指〉 ブ: [nipusanu] 〈鈍い〉

ただし、共通語のブが /ba/ に対応する例もみられる。 [kabaitʃi̯kirux] 〈被せる〉

べ: [nabi] 〈鍋〉

- ボ: [bux] 〈盆〉, [mintsïbu] 〈耳壷〉
- 2.1.11. マ行音
 - 共通語 マ ミ ム メ モ

小浜島 ma mi mu mi mu

- マ: [maku] 〈巻く〉, [sïma] 〈島〉, [kamandu] 〈竈〉, [nama] 〈生〉
- ミ:[min] 〈耳〉, [mitsï] 〈道〉

ただし、共通語のミが語末にある場合には /N/ に対応するのが一般的で ある。

[sïn] 〈炭〉, [kan] 〈神〉, [nan] 〈波〉, [nun] 〈蚤〉

ム: [muku] 〈婿〉, [musï] 〈虫〉, [mura] 〈村〉

なお、共通語のムが /pu/ に対応している例もみられる。

[kipusï] 〈煙〉

- メ: [mix] (目), [mami] (豆), [(?)ami] (雨)
- モ: [ʃamuturï] 〈軍鶏〉

2.1.12. ヤ行音

共通語	ヤ	ユ	Е
小浜島	'ja	'ju	'ju

ヤ: [jama] 〈山〉, [jakux] 〈焼く〉, [kajajax] 〈茅屋〉

ただし、共通語のヤが軟口蓋音に先立つ環境では /м/ に対応する例がみ られる。

- [ŋkamahanu] <喧しい>
- ユ: [jun] 〈弓〉, [jux] 〈湯〉

ただし、共通語のユが語末にある環境では /'i/ に対応している。

[kai] 〈粥〉, [�ui ~ fui] 〈冬〉

- ヨ: [juː] 〈よう (良く)〉, [jumi] 〈嫁〉
- 2.1.13. ラ行音
 - 共通語 ラ リ ル レ ロ
 - 小浜島 ra rï ru ri ru

ラ: [mura] 〈村〉, [tura] 〈寅〉, [ramma] 〈欄間〉

わずかであるが、共通語のラに /sa/ が対応している例がみられる。 [tsïsa] (面 (頬))

- リ: [turi] 〈鳥〉, [muri] 〈森〉, [(?) akaːri] 〈燈 (障子)〉
 - ただし、共通語のリに /ri/ や /'i/ が対応している例もみられる。
 - [**�u**kui ~ f**u**kui] 〈埃〉

また、語例は少ないが共通語のリに /si/ が対応している例もある。 [kiʃi] 〈霧〉

用例は少ないが、共通語のラに /ra/ が対応している場合がある。

[(?)aːra] 〈蟻〉

- ル: [kurumax] 〈車〉, [p^sïru] 〈蒜 (大蒜)〉
- レ: [bo:ri no:si] 〈疲れ直し (慰労会)〉, [(?) irirux] 〈入れる〉 ただし、共通語のレが /ri/ に対応している例もみられる。

[sundarï] 〈簾〉

用例は少ないが、共通語のレが /si/ に対応している例もみられる。

-280 -

[ki∫irun] 〈切れる〉

- 口: [(?)iru] 〈色〉, [Φ ukuru ~ fukuru] 〈袋〉
- 2.1.14. ワ行音
 - 共通語 ワ (ヲ)
 - 小浜島 ba bu
 - ワ: [bana] 〈罠〉, [tʃaban] 〈茶碗〉, [baki mintsi] 〈湧き水〉[bakamunu] 〈若者〉
 - ただし、共通語のワが /'wa/ に対応している例もみられる。 [wata] 〈綿〉
 - (ヲ): [buː] 〈苧〉, [buː] 〈尾〉, [bui] 〈甥 (姪)〉, [bututi] 〈一昨日〉
 ただし、共通語のヲが /pu/ に対応する例もみられる。
 [putu] 〈夫〉

2.2. 拍連続の対応

2.2.1. 共通語の /Ce'o/ の拍連続(歴史的仮名遣い「エヲ」も含む) は
 /Cjor/ に、/Ci'u/ の拍連続は /Cjur/ に対応している。
 エヲ: [mjo:tu] 〈夫婦〉

イウ: [(?) ifu:su] 〈石臼〉

- 2.2.2. 共通語の /Cu'i/ の拍連続は /Ci/ に対応している。ウイ: [du:fi:] 〈雑炊〉
- 2.2.3. 共通語の /Ca'i/ と /Ca'e/ の拍連続(歴史的仮名遣い「アへ・ アキ」も含む)は /Ca'i/ と /Cer/ に対応している。
 - アイ:/Ca'i/ [mainitsï] 〈毎日〉, [kaina] 〈腕〉, [pai] 〈灰〉, [handai] 〈飯台〉/Cer/ [peːru фu̯tsï ~ peːru fu̯tsï] (入り口), [deːntsï] 〈大事 (大変)〉
 - アエ: [pai] 〈蝿〉, [mainta] 〈前〉

2.2.4. 共通語の /Ca'wa/ の拍連続は /Car/ に対応するのが一般的で ある。

アワ: [(?)ax] 〈粟〉, [kax] 〈皮〉, [kaxra] 〈瓦〉, [taxra] 〈俵〉

2.2.5. 共通語の /Ca'u/(歴史的仮名遣いではアフ)は /Cor/ に、/Ca' o/の拍連続(歴史的仮名遣いでアホ)は /Ca'u/ に対応するのが一般 的である。

アウ: [soː]〈竿〉 [boː]〈棒〉, [dʒoːtoː]〈上等 (良い)〉, [tintfoː]〈天井〉 [poːk^si]〈箒〉

アオ: [(?)au] 〈青 (緑も含む)〉

ただし、共通語の /Ca'o/ が /Co/ に対応する例もみられる。

[dongu] 〈道具〉

なお、共通語の /Cjor/(歴史的仮名遣いヤウ /Cja'u/) も /Cor/ に対応 する。

ヤウ: [tfo:mi] 〈長命 (長生き)〉

- 2.2.6. 共通語の /Co'u/ の拍連続は /Cur/ に対応するのが一般的である。オウ: [dux] 〈胴(体)〉
- 2.2.7. 共通語の /o'we/ と /o'wi/ と /u'e/(歴史的仮名遣いではオエ〈ヤ 行のエ〉・オ ヱ・ウヘ・ウヱを含む)は /u'i/ に対応するのが一般的 である。

オエ: [kui] 〈声〉, [kuirun] 〈越える〉

ウエ:[(?)ui] 〈上〉

- 2.2.8. 共通語の /CVrV/ は、Cが無声の場合は /Cur/ (C=無声子音) に、
 Cが有声の場合は /NCa/ (C=有声子音) に対応するのが一般的である。
 シル: [sur] (汁)
 - ただし、共通語のシラには /ra/ が対応する。

[para] 〈柱〉

ズラ:[kandza] 〈葛〉

ただし、共通語のブラには /ba/ が対応する。これは宮古諸方言と同系の 変化である。

ブラ: [(?)aba] 〈油〉

3. 結語

これまで述べたことをまとめると以下のようになる。

- (1)母音に中舌母音 /i/ が認められる。また、摩擦的噪音 [^s] も認められる。
- (2) 喉頭閉鎖音 [7] は音素として認められない。
- (3) 石垣方言の老年層が /p/ → /h/ 化しているのに対し、/p/ を保持している (ただし、一部 /p/ → /h/ 化しているものもある)。
- (4)〔f〕と〔φ〕は自由変異である。
- (5) いわゆる共通語の濁音との対応関係に /N/ の添加、無声子音へと変 化する例が認められる。
- (6) 音声的な特徴として、母音〔i, ï, u, a〕の無声化が激しく、続く有声 子音〔m, n, r〕まで無声化する。

小浜方言の音韻・音声の特色や音韻対応の特徴を挙げたが、ここでは一つ 一つの項目について詳しく論じることができなかった。今後、調査を重ねて 別稿にて論じてみたい。

〈注〉

- (1)明和の大津波(1771年)の際の八重山の人口については、「大波之時各村之 形行書」(石垣市総務部市史編集室編『石垣市史叢書12』所収)が参考になる。 この記事によると、小浜村の人口は「頭高男三百八拾八人、女五百拾弐人」 で、合計900人とある。
- (2) 注(1) 同書によれば、宮良村の住民1221人中、生き残ったのは171人であったという。そこで在番であった野国親雲上に願い出て、小浜村から320人を移住させ、合計491人で宮良村を再建している。
- (3) 小浜方言の語彙資料として、これまでに、小浜方言をはじめて I.P.A で記

録した宮良當壮(1930)がある。語例は少ないが、1900年前半の調査記録と して貴重なものである。なお、語彙資料としては高原繁(1979)も大切な資 料である。片仮名表記ではあるが、小浜島出身者による報告であり、言語生 活の様子が随所にみられる。はじめて小浜方言の音韻について報告したのは、 平山輝男・大島一郎・中本正智(1967)である。24の音素を認め、音韻の特 徴と主な対応関係を報告している。紙幅の都合であろうが、詳しい報告がな いのが残念である。この後、服部四郎氏の基礎語彙調査表を用いた調査報告 がいくつかみられる。琉大方言研究クラブ(1969)や中松竹雄(1987)など である。琉大(1969)は、今から34年前の記録であり、I.P.A で表記された まとまった資料として参考になる。また、この基礎語彙をもとにまとめた音 韻の報告も参考となる。中松(1987)は基礎語彙の報告である。古見・小浜・ 宮良三地点の基礎語彙を比較して提示した点で他と異なっている。古見方言 の音素の提示と、小浜・宮良方言との相違について多少記述しているが、詳 しい記述がないのが残念である。中本正智(1976・1981)では小浜方言の主 な特徴が述べられている。加治工真市(1982)は、これまでの先行研究を踏 まえ、特に有声破裂音の半有声音は「上代国語の六母音説」(服部四郎氏) との関連性も提示するなど、興味深い記述がみられる。仲原穣(2002)は、 琉大(1969)や中松(1987)などと同じ基礎語彙調査表を用いた語彙資料の 提示であるが、紙幅の都合で前半部分しか報告していない。今後機会をみて 報告したいと考えている。小浜方言の文法に関する報告として、平山・大島・ 中本(1967)がある。動詞の種類と活用、形容詞の活用、代名詞についてま とめている。はじめて小浜方言を総合的に分析し、報告したものである。琉 大(1969)には、音韻や語彙の他に動詞・助詞の報告もみられる。助詞の詳 しい研究としては、野原三義(1999・2000)がある。助詞を分類し、その用 法と文例を報告したものである。

(4) 小浜方言基礎語彙調査のインフォーマントは、大嵩昭氏(1912年生)、慶田 城ヒテ氏(1912年生)、小浜ミヨ氏(1914年生)、大久秀氏(1921年生)、新 本英光氏(1922年生)、新本ユキ氏(1921年生)である。また、黒島精耕氏 には調査に際し、いろいろとお世話になった。調査にご協力してくださった 方々に心より感謝申し上げる。本稿は、文部科学省科学研究費補助金「特定 領域研究『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』(領域代表、宮岡伯人)」により行った調査の一部を利用した。

調査方法は「面接調査法」を用いた。録音は主にDAT録音機、デジタル ビデオカメラ(補助機材としてMD録音機)を使用した。

- (5) 特殊拍の /N, Q, R, / はスモール・キャピタルで示す。
- (6) これらの拍は他の拍とのバランスを考えると体系上立ち得る可能性がある が、著者のこれまでの調査では用例がでていない拍である。今後補足調査を おこなって詳しく調べるつもりである。
- (7) 波照間方言では、「sima」〈島〉、「pana」〈鼻〉、「pana」〈桂〉、(インフォーマント:浦仲浩氏〔1924年生〕他)。古見方言では、「kimu」〈肝〉、「pana」〈鼻〉、「turi」〈鳥〉(インフォーマント:大底朝要氏〔1934年生〕)。
- (8)「墓」は、これまでにいくつかの語形が報告されている。琉大(1969)では[mund 30:]、高原繁(1979)では「ムンジュ」とある。ちなみに、宮良當壯(1930)では「墓」の項目に小浜方言の用例は挙げられていない。
- (9) 当該方言の /r/ は弾き音であり、本来は [r] と表記するものであるが、本稿 では便宜上 [r] で示す。

付 記

加治工真市先生には大変お世話になった。大学院で言語学や日本語学、方言学、 音声学を教わったことはもちろんであるが、先生の学問に取り組む真摯な姿勢に もとても感銘をうけた。一度だけご一緒させていただいた竹富島への臨地調査で は、被調査者への心配りとことばの記録・保存の意義を教えていただいた。また、 これは研究室で被調査者を招いて調査をなさる際にも感じたことだが、先生は調 査している時、本当に楽しそうでにこやかな表情をされている。琉球諸方言の音 声や語法・語彙を聞くことがとても嬉しそうである。そんな先生だからこそ、多 くの被調査者の方々との信頼関係が保たれているのだと思う。

今回、加治工先生が22年前にご発表なされた「琉球、小浜方言の音韻研究序説」 を参考にしつつ、論をまとめてみた。まだ万全といえる内容ではないが、ここ数 年の臨地調査の一区切りとしてまとめたものである。加治工先生への感謝の意を こめてここに記す。

主要参考文献

- ・石垣 繁 1971 「八重山・白保方言の研究-その音韻、アクセントについ て-」『沖縄文化』第36・37合併号 沖縄文化協会
- ・加治工真市 1982 「琉球、小浜方言の音韻研究序説」『琉球の言語と文化』 論集刊行委員会
- ・加治工真市 1987 「八重山方言の比較音韻論序説」『琉球方言論叢』琉球方 言論叢刊行委員会
- ・加治工真市 1996 「波照間方言の音韻研究」『沖縄文化研究』第22号 法政 大学沖縄文化研究所
- ・加治工真市 1998 「古見方言の基礎語彙」『沖縄芸術の科学』第10号 沖縄 県立芸術大学附属研究所
- ・久 野 眞 1992 「新城下地島方言の音韻」『南琉球新城島の方言』國學院
 大學日本文化研究所
- ・高 原 繁 1979 『ふるさとの味 小浜語彙 (こはまことば)』自家版
- ・仲 原 穣 2003「石垣島宮良方言の音韻研究序説」『琉球の方言』27号 法 政大学沖縄文化研究所
- ・仲 原 穣 2002「小浜島方言の音韻的特徴と問題点-概説と基礎語彙資料」 狩俣繁久・津波古敏子・加治工真市・高橋俊三編『消滅に瀕した琉球語に関 する調査研究』「環太平洋の言語」成果報告書 A4-019
- ・中本 謙 1999 「八重山白保方言の音韻」『琉球方言音韻・文法・語彙の 研究-周辺諸方言との比較研究も含めて-〈その1〉』千葉大学社会文化科学 研究科
- ・中本 正智 1976 『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
- ·中本 正智 1981 『図説琉球語辞典』力富書房金鶏社
- ・野原 三義 1999 「八重山竹富町小浜方言の助詞(1)」『八重山、竹富町調 査報告書(1)-地域研究シリーズ No27-』沖縄国際大学南島文化研究所
- ・野原 三義 2000 「八重山竹富町小浜方言の助詞(2)」『八重山、竹富町調 査報告書(2) – 地域研究シリーズ No28 – 』沖縄国際大学南島文化研究所
- ・服部 四郎 1960 『言語学の方法』岩波書店

- ・宮良 當壮 1930 『八重山語彙』東洋文庫
- ・平山輝男・大島一郎・中本正智 1967 『琉球先島方言の総合的研究』明治書 院
- ・平山輝男・中本正智 1964 『琉球与那国方言の研究』東京堂
- ・琉大方言研究クラブ 1969 「小浜方言の調査報告」『琉球方言』第9・10号 琉大方言研究クラブ

(なかはら じょう・千葉大学大学院博士課程)